

第3回世界集中治療・救急医学会総会印象記

本学会は、4年ごとに開催されているもので、今回は、合衆国の首都ワシントンD.C.において、1981年5月24日から29日にわたり開催された。アメリカ救急医学会（SCCM）の10回目の年次総会と合同で、もたれたこともあり、SCCMの会長、Civettā氏が総会長を務めた。世界の50カ国から約2,600人の参加者で、このうちの1/4は、ICUないしCCMの専任看護婦であった。日本からの参加者は、約50名であった。5月末のワシントンD.C.は、ちょうどバラが満開で、気候は日本の初夏という感じで、気温は30°~32°C、ポトマス河の辺では、若いカップルや家族連れが夏の日差しを楽しんでおり、河に遊ぶヨットの白い帆が青い空、緑の木々とあざやかなコントラストを示していた。会期中の天候は、3日目の26日は午前中に雨をみたが、他は晴天であり、学会を盛り上げる一役をなしていた。

学会のプログラムは、Crit. Care Med. 9(3), 1981に掲載されているので、重複は避けるが、1) 開会式、2) 一般演題、3) パネル、4) 特別講演、

などについての感想を記述したい。

1) 開会式: Opening ceremony とはいわずに convocation と呼んでいた。5月24日午後4時から学会場にあてられた、ワシントンヒルトンホテルのインターナショナルボールルームにおいて開催された。数千人を収容できる大ホールであったが、日曜日であったこともあり、参加者は500人前後と思われた。開会宣言に先立って、赤いコスチュームに身をつつんだ合衆国海兵隊吹奏楽団による合衆国国歌の吹奏、6名の若くりりしい海兵隊員による国旗掲揚とマーチ、この間、参加者は全員起立、日本では、とても想像のできないシーンであったが、何か身のぎりっとしめる感じをもったのは、著者一人であったろうか。誰もが知っている「錨を揚げて」の演奏に続いて開会宣言が行われた。総会長Civettā氏の挨拶は、おざなり的であったが、レーガン大統領からの電報披露が会長により行われた。内容は、「この総会が米国の首都ワシントンD.C.において開催されることを、非常な喜びと感じている。自分自身、ごく最近の体験からも、医学における、この分野の重要性を痛感している。今回の学会がICU, CCMの発展に貢献するものと信じている……。」といったものであった。レーガン大統領が、3月30日に狙撃されたのは、学会場ワシントンヒルトンホテルの正面玄関であり、氏が収容されたのは、ジョージワシントン大学病院のCCMであったことを知っていた者にとっては、何と皮肉に感じられたことか。この場で、CCMやICUの必要性と重要性を、これほどに実感をもって語れるものは、レーガン大統領以外には、いなかったのではなからうか。この後、参加各国(35カ国)がスライドと音楽で紹介された。



(左) 劔物 修先生 (右) 田中一彦先生

アルゼンチンから始まり、中間ごろで日本の紹介が、名古屋市立大学の青地教授により行われた。日本の伝統文化、日本の現在、ICU、CCMの数、北里大学病院の全景とICUの内部などが、琴の音とともに正面の3つのスクリーンに大きく映し出されていた。日本のICUやCCMの歴史は浅いにしても、会員数の多いこと、関心度が高いことなどが、参加者に伝わればと期待していた。Convocationの大半が、この各国の紹介にあてられており、終了ごろには、飽きを感じないでもなかったが、最後に非公式の参加であったが、モスクワのUSSRメディカルサイエンスアカデミーのリアニマトロジー研究所の長老Negovsky氏の紹介があり、会場からの大きな拍手をさそっていた。

2) 一般演題：演題の採用は、23カ国から123人の審査により行われ、口演演題はより一般的なもので、ポスター演題は、比較的特殊なものとして決定された。35カ国から578が採用され、うち口演296、ポスター282であった。日本からの演題は、口演15、ポスター10の25題であった。口演演題は、5日間にわたり3つの会場（ジョージタウン、ジェファソン、リンカーン）で、午前7時30分から午後5時まで、熱心に行われていた。一演題につき発表10分、討論5分で、英語、スペイン語、フランス語が、学会用語として認められていたが、ほとんどの発表は、英語で行われていた。各会場とも、発表、討論は、すべて3カ国の同時通訳が見事に行われ、Audio Transcripts社によって、3カ国で録音され会場で売られていた。参加者の態度は、立派なものであり、発表のあとには必ず拍手を送り、興味のあるセッションに参加していることもあり、質問も多く出されていた。質問者は、近くのマイクの前に並んで待っているのには感心した。短い討論時間を、有効に活用しようとする態度を感じとれた。モデレーターは、各セッション（4～6演題を担当）2人おり、もちろん、その道の権威であるが、その質問の内容は、実に発表者の論文を、良く勉強してきていることを示していた。口演演題は、49のセッションは分けられ、外傷、熱傷、輸液・輸血、ショック、呼吸管理、循環管理、コンピューター、組織、教育など、ICU、CCMの全般に関するものであったが、今

回の学会で印象強く感じたのは、high frequency ventilation, adult respiratory distress syndrome, positive and expiratory pressureなど、呼吸管理に関するものが参加者の興味を引いていた。ポスター演題は、27～29日の3日間、29セッションに区分され、学会展示場で発表された。医療機器展示場の一部を仕切った会場であったためもあり、参加者は少なく、寂しい雰囲気であった。脳蘇生に関するものが関心を呼んでいたようであったが、呼吸管理に関する演題、コンピューター、モニタリングについての発表が目立った。

3) パネル：小児集中治療、救急医療看護、コンピューター利用、経皮酸素および炭酸ガス分圧モニタリング、輸液療法、の5つがもたれた。今回の学会では、小児に対する集中治療、救急医療に対する関心が高いことは、このパネルはもとより一般演題からも、知ることができた。小児集中治療では、ジョージワシントン大学麻酔科、国立小児医療センターICUのHalbrook氏とイリノイ大学病院小児科、新生児科のVidyasagarの2人が座長を務め、Reyes' syndrome, near drowning, neurologic intensive care, pediatric intensive care-The French perspective, -The U.S. perspective, The Japanese perspective, ventilation & pediatric intensive care-acute and chronic, an overview of neonatal intensive care 1981と8人の演者が、約3時間30分にわたり発表した。きわめて広い領域の問題を扱っていること、フランス、米国、日本の現状や展望などは話しとしては興味あるものでも、パネルとしてはちょっと無理があったように思われた。フランスからの発表の後には、参加者は半分になってしまい、国立小児病院麻酔科の宮坂氏の発表のときは200人くらいに減っていた。宮坂氏の発表は、国立小児病院の実績、国立小児病院ICUでの経験を主にしたものであり、種々のモニタリングの工夫なども、興味あるものであった。日本における小児専門病院は少ないけれども、各大学病院には、必ず小児科があり、そのなかにICUをもつ施設も多いわけで、氏の日本では小児病院は少なく、小児ICUも少ないという発言には、著者自身抵抗を感じないわけにはいかなかった。日本の小児ICUについて、その現況、今後の動向を語

るに適した人物は、氏のほかにいないわけでもあ
るまい。連続的に経皮的に PO_2 , Pco_2 を測定する
ことは、新生児、小児のみならず ICU, CCM で
扱う、すべての患者に必要なであり、non-inva-
sive である点から、今後臨床応用が盛んになる
と考えられ、今回のパネルにおいても、多くの関
心を呼んでいた。輸液療法においては、1部
-blood solutes, colloids, and cells, 2部 -blood
substitutes, 3部 -blood components に分けら
れ、それぞれの部門で3人ずつの演者が、日頃の
研究成果を発表し、CCM における外傷やショッ
クのさいの輸液療法について討論した。できるだ
け輸血を避けようとする傾向が強くなり、日本医科大
学の西邑氏が、fluorocarbon emulsions に関し
て、その臨床応用の展望を発表していたのが印象
的であった。

4) 特別講演 (plenary lectures) : 会期中、
毎朝7時30分から午後12時30分、4~5人の講師
により行われた。CCM における呼吸管理、感染
体策、疼痛、不安、睡眠の問題、看護法、小児外
傷、小児の循環動態モニタリング、心肺脳蘇生な
ど、18の有益な講演がもたれた。この内容は、
Critical Care-State of-the Art-Volume 2にお
さめられ、35ドルでSCCMから発売されている。
各講義の内容は、看護婦、開業医、専門医などを
対象にしているためか、実に理解されやすく組立
てられていた、そのひとつひとつが、最近のCCM
の動向を示唆するものを感じた。著者が、もっと
も印象強く傾聴したものは、Peter Safar 氏の car-
diopulmonary-cerebral resuscitation であつた。
数多くのスライドは、すべて氏のこれまでの業績
の一部であり、比較的理解しにくい氏の英語を、
補うに十分であった。氏の心肺脳蘇生に関しては、
Principles and practice of emergency medicire,
Saunders 1978 で、良く知っていたが、その内容
は、決して陳腐なものとはいわないまで、この講
義の up-to-date な内容に比較すれば、やはり古
くなっているのである。High frequency percu-
taneous transtracheal jet ventilation による呼
吸管理法は、著者にとっては耳新しい用語であつ
た。Weisfeldt により紹介された、いわゆる“new
CPR” に関しては、氏は反対であり、その理由は、
高い気道内圧が頭蓋内圧を上昇させて、脳の酸素

化を防げるからとしている。Cough CPR につ
いても研究中のものとし、いわゆる従来のABC
方式が、今のところ最良のものと強調していた。
蘇生後の脳保護、あるいは脳蘇生のための集中治
療について、最新のデータを示しながら、力強く
講義していた。CPCR の教育について、講義はあ
まり有益ではなく、練習が必要であること、とき
どき技能をチェックすることが大切であることを
強調して、講義は終わった。アメリカの大学病院
や教育病院で働く医師は、すべて1年に1回CPR
のトレーニングを受けることが進められている。
著者もつい最近、客員教授として勤めているアイ
オワ大学において、約2時間の実地訓練とペー
パー試験を受けて、American Heart Association
から certificate (1年有効) をもらったところ
である。

5) 学会余話 : アイオワシティから車でシー
ダーラピッドまで30分、ここからシカゴまで1時
間の空の旅、シカゴで乗り換えて、ワシントン
まで約1時間半、8年ぶりに訪れたことになる。空
港から airport limo で宿 The Shoreham に着
いたのは、5月23日の午後2時近くであった。アイ
オワシティのアパートを出たのが朝8時ごろであ
るから、時差を考慮すると6時間要したことにな
る。チェックインをすませ会場まで、日だまりを
歩くこと10分、レジストレーションを終え、24日
の convocation までの時間をどのように過ごす
かを考えていると、pre-congress tour-Historic
Virginia という文字が眼に入った。5月24日朝
5時に眼がさめた。Iowa では、毎朝6時起床、
7時から麻醉開始であり、4月1日からの習慣は、
ワシントンにきても続いているのである。洗面を
済ませ、発表原稿を大声で2~3度練習し、10分
にあと10秒であることを確認し、若干安堵を感じ
た。午前10時30分、ロビーに降りてゆくとピアノ
(ショパン) の音が耳に入ってきた。ホールの中
央で黒人の女性が弾いていた。その周囲には、こ
れからパーティでもあるかのように、ボーイが料
理を並べていた。ウェイトレスの一人に、「何が
あるのか？」と訊ねると、11時からランチが始
まるのであるとのことで、小生もテニスコートと
プールの見えるバルコニーに席を取ることにした。
席につくと「シャンペンは？」といわれたが、こ

れから Historic Virginia の tour を予定していたので、「no thank you」. パフェ（日本でいうバイキング）だから、自分で好きなものを取ってくるようにいわれ、大きな皿にパン、イチゴ、チーズなどを少々もってきた。久し振りの大都会のホテル、一体いくらの心配になり、「check, please!」みると12.95ドルとある。これにはシャンペンも含まれているのが分かった。そこでシャンペンをもらい、皿に今度は、あつあつのローストビーフ、サラダを取り、おもむろに食事をした。13ドルは日本円にすれば高く感じないが、大病院の食堂では、3ドルで十分な昼食が楽しめるのである。

Historic Virginia-George Washington が、1754年から1979年に死去するまで住んでいた家 Mount Vernon を訪れる tour である。ワシントンヒルトンホテルからバスで George Washington Memorial Parkway を通って約45分かかって着く。8年前、ボストンから帰国するときみたと、全く変わってはいなかった。実に良く管理されていることに、再び感心した次第である。この tour の参加者は17名、運転手と案内嬢、19名で大型の観光バス、ゆったりした気分、朝のシャンペンも残っており、リラックスした気分を楽しむことができた。日本人は小生一人であったが、スイス、ユーゴスラビア、オーストリア、シンガポール、そして合衆国からの参加者と知り合うことができた。バスの窓から感じたことは、日本車の多いことで、ある信号では、ホンダ、ダットサン、トヨタ、スバルと日本車のオンパレードであり、これではアメリカの自動車業界も頭の痛いわけである

と。

National Symphony Orchestra : 5月28日午後8時30分からの開演に先き立ち、学会場である医療機器会社のスポンサーで、ワインとチーズがサービスされた。小生も札幌時代の先輩のN氏、同僚のK氏らと参加することにした。Kennedy Center のコンサートは15ドルで、オーケスト席を予約することができた。Erich Kunzel 指揮による、Bizet, Offembach の小曲につづき、16歳のアメリカ少女によるピアノ (Mozart の Concerto No. 21 in C major) が主であったが、後半は Pops であり、ミュージカル、1920~'40年代の Big Band Sounds (グレンミラー、ベニーグッドマン)、フォースター、カントリーと実に楽しいものであった。この日は学会の貸切りであったこともあり、指揮者はマイクを片手に、種々の説明とジェスチャー、いろいろの指揮者の真似をしたり、観衆を楽しませるに余念がなかった。かつて Boston Pops Orchestra をよく楽しんだが、National Symphony が Pops を演奏するとは、考えてもいなかっただけに、実に思い出深い一夜を過ごすことができた。

この学会には、閉会式はなかった。次回はイスラエル、8年後は日本で、開催されることになると聞いている。今から8年後を期待するのは早いとは思うが、それまでに日本の ICU および CCM のより一層の発展と会議のための組織づくりを望む一人である。

劔物 修

北里大学医学部麻酔科